法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

『資本論』第2部および第3部の執筆時期の関連についての再論 : 第2部第1稿についてのMEGA付属資料を読んで

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
57
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
169
(終了ページ / End Page)
194
(発行年 / Year)
1989-11-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008505

KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review)
Hosei University, Tokyo, Japan
Vol. 57, No. 3, 1989

『資本論』第2部および第3部の執筆時期の関連についての再論

——第2部第1稿についての MEGA 付属資料を読んで——

大谷禎之介

目　次

はじめに
1. 共同稿と拙稿でのそれへの批判
2. 拙稿での批判の三つの論点
3. モスクワからの返書とそれへの反論
4. 「1863—1865年草稿」にかんする2論文
5. MEGA 付属資料での考証

はじめに

筆者はかつて，『資本論』第3部第1稿についての調査結果をまとめたさいに，この第3部第1稿と第2部第1稿との関連について若干の考証を試みた。それは同時に，MEGA 編集者でもあるモスクワの研究者たちの考証の内容と結論とに異論を唱えるものでもあった。その後，筆者の見解を，アムステルダムの社会史国際研究所（IISG）の機関誌『社会史国際評論』(IRSH) 掲載の個別論文のかたちで発表したが，その原稿を読んだモスクワの研究者たちからの返書には拙見にたいする若干の反論が示されていたので，筆者は，第3部第25章にかんする論文のなかで，返書の内容を紹介し，それにたいする反論を簡単に述べておいた。その後，この問題について MEGA 編集者たちが見解を変更したことを示す二つの論稿が発表

され，さらに1988年に刊行されたMEGA第2部第4巻第1分冊では，この分冊所収の『資本論』第2部第1稿のための付属資料のなかで，筆者が問題にしたすべての点について，編集者の判断が示された。

ところで，アムステルダムの雑誌での拙稿は主題をこの問題にあてていたが，これまで日本語で発表した筆者の見解はすべて，他の主題にかんする論稿のなかで，いわば付論的に述べたものであり，しかもこの論争にはその後一定の推移があったので，どこかでそれらについて触れたいと考えながら，その機会のないまま今日にいたった。さいわい，MEGAでの考証の発表によって，問題点のすべてについて決着がついたので，この機会に問題そのものを主題的に取り上げて，論争を振り返り，その経過をまとめておくことにした。

1. 共同稿と拙稿でのそれへの批判

1981年にヴィゴツキー，ミシケーヴィッチ，チェルノフスキー，チェプーレンコの4人は，マルクスが『1861—1863年草稿』を書き終えてから『資本論』第1巻初版を刊行するまでの時期の『資本論』諸草稿をもとに『資本論』全3部の執筆時期の考証を行なった，「1863—1867年におけるK.マルクスの『資本論』の執筆の時期区分について」という共同論文を発表した[1]。この論文は，草稿の用紙の透かしまでも利用しようとした本格的な考証的研究であって，かなり立ち入った論拠をあげて『資本論』執筆についての時期の考証を行なっており，とりわけ『資本論』第2部および第3部については，それまでほとんど知られていなかった草稿を使った新しい事実を明らかにしていた点で，注目すべき労作であった。また，同じ1981年に，この4人のなかの1人であるチェプーレンコが，「K.マルクスの『資本論』第2部の第1—4稿の時期推定をめぐる諸問題について」という論文で，とくに第2部の草稿について，これもそれまで公表されたことのなかった草稿上の事実をあげて，表題にある第2部草稿の執筆順序と時期とについての研究を発表した[2]。その翌年の1982年に，上の4人は，

ふたたび上の共同論文と同じ表題で，上の共同論文およびチェプーレンコ論文で述べられていたのと同じ考証および結論を含む論文を，こんどはドイツ語で『マルクス=エンゲルス年報』第5号に発表した[3]。この『年報』は，モスクワおよびベルリンの両マルクス=レーニン主義研究所のMEGA編集部の，MEGA刊行上の機関誌であるから，この発表は，MEGA編集部がいわば4人の見解にお墨付きを与え，以後これにもとづいてMEGAの編集が進められることを意味していた。

1981年から1982年にかけてアムステルダムの社会史国際研究所とモスクワのマルクス=レーニン主義研究所とで『資本論』第2部および第3部の諸草稿を調査した筆者は，この三つの論稿のなかで示された事実と考証とのなかに誤りがあることに，最初の共同論文を読んだときにすでに気づいていた。そのうちの一つの論点は，モスクワのマルクス=レーニン主義研究所で仕事をしていたときに，チェプーレンコと判断の違いを互いに確認していた点であり，アムステルダムでの筆者の再調査ののちに調査結果を知らせる，という約束をしていたものであった。そこで1983年に，「カール・マルクスの『資本論』第2部および第3部の執筆の時期推定について」という表題で，三つの論点にしぼって考証論文を書き，アムステルダムの社会史国際研究所の機関誌『社会史国際評論』で発表した[4]。その内容は活字になる前にモスクワに送っていたが，それにたいしてはまもなく，モスクワの見解が送られてきていた。

三つの論点とは次のものであった。(以下では，簡単化のために，上の二つの共同稿およびチェプーレンコ稿を一括して「共同稿」と呼ぶことにする。)

第1。共同稿では，第2部の一つの短い断稿を第2部第4稿のあとに書かれたものであるとして考証が進められているが，筆者はこれを，第4稿のまえに書かれたものだと判断した。

第2。第2部第1稿には，それの表紙とされている紙に書かれた第2部のプランがあって，共同稿では，このプランは第1稿を書き始める前に書

かれたものであるとしているが，筆者はこれを，逆に第1稿の執筆後に書かれたものだと判断した。

第3。共同稿が出した，マルクスは第3部第1稿を執筆している途中で第2部第1稿を書き上げた，という判断は明らかに正しい。ところが共同稿は，上の第2の論点での彼らの判断をも前提にして，第2部第1稿が書かれた時期は，どんなに早く見ても第3部第1稿の256ページが書かれた後，そしてどんなに遅く見ても275ページが書かれる前であった，と推定している。筆者はこれにたいして，前者は182ページ，後者は243ページと訂正されるべきだと考えた。

1) В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над《Капиталом》в 1863-1867 гг.*,《Вопросы зкономики》, №. 8, 1981. 邦訳：中野雄策訳，『世界経済と国際関係』第56号，1982年。
2) А. Ю. Чепуренко, *К Вопросу о датировке I-IV рукописей второй книги《Капитала》К. Маркса*,《Научно сообщения и документы по марксоведению》, ИМЛ при ЦК КПСС, Москва, 1981.
3) L. Miskewitsch/M. Ternowski/A. Tschepurenko/W. Wygodski, Zur Periodisierung der Arbeit von Karl Marx am „Kapital" in den Jahren 1863 bis 1867. In: Marx-Engels-Jahrbuch, Bd. 5, Berlin 1982.
4) Teinosuke Otani, Zur Datierung der Arbeit von Karl Marx am II. und III. Buch des Kapital. In: International Review of Social History, Vol. XXVIII, Part 1, 1983.

2. 拙稿での批判の三つの論点

〔第1の論点について〕

これらの論点のうち，第1の論点については，1982年に，拙稿「『資本論』第3部第1稿について」のなかで，第3部第1稿の第4束（商業資本にかんする第4章と利子生み資本にかんする第5章とを含む束）を紹介するさいに簡単に触れたうえで，稿末の付論「第2部第4稿とその断稿とに

ついて」のなかで詳論しておいた[5]。要するに，モスクワにある第2部第4稿の冒頭の部分のフォトコピーと断稿のフォトコピーとが，どこかの時点で入れ替えられてしまったのに（オリジナルはアムステルダムにあり，モスクワにはフォトコピーしかない），共同稿はこの入れ替わりに気付いていないために，間違いを犯しているのだ，と推定したのであった。この点については，その後1983年に執筆した拙稿「「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について(上)」でも記しておいたように[6]，筆者との議論を契機に行なわれたアムステルダムでのミシケーヴィチおよびヴィゴツキーの調査で入れ替わりの事実が確認され，モスクワからの返書によって，「貴見とまったく同じ結論に達した」ことが伝えられてきた。つまり，モスクワにあるフォトコピーには入れ替わりが生じていたのであって，それらを正しい位置に戻すならば，断稿は第4稿より前に書かれたのだ，という筆者の結論が承認されたのであって，この問題はこの時点で決着がついたのであった。

〔第2の論点について〕

第2の論点は，これもすでに，拙稿「『資本論』第3部第1稿について」のなかで要点を述べていたもの[7]であるが，アムステルダムの雑誌では，それを整理して，より詳しく述べたのであった。先に書かれたのは第2部第1稿かプランか，という一見ささいな問題を立ち入って論じる必要があったのは，この点についての躓きが，次の第3の論点での共同稿の誤った推論の決定的な原因となっていたからである。第3の論点との関連については，のちに述べよう。

共同稿も，第2部の諸草稿について論じたチェプーレンコ稿も，問題の第1稿表紙のプランは「明らかに」第1稿執筆以前に書かれたものと見ていた。この先後関係については論拠がまったく挙げられていない。そのように思い込んでいた，というのが実相であろう。筆者は，両者の先後関係は共同稿の判断とは逆であると考え，その理由を考証によって明らかにし

ようとした。

第1稿の表紙プランというのは，次のようなものである。

「第2部。資本の流通過程。〔Der Cirkulationsprozeß des Kapitals.〕

第1章〔Kapitel〕。資本の流通。〔Die Cirkulation des Kapitals.〕

1) 資本の諸変態。貨幣資本，生産資本，商品資本。〔Die Metamorphosen des Kapitals. Geldkapital, Productives Kapital, Waarenkapital.〕

2) 生産時間と流通時間。〔Produktionszeit und Umlaufszeit.〕

3) 流通費。〔Cirkulationszeit.〕

第2章。資本の回転。〔Der Umschlag des Kapitals.〕

1) 回転の概念。〔Begriff des Umschlags.〕

2) 固定資本と流動資本。回転循環。〔Fixes Kapital und Cirkulirendes Kapital. Umschlagscyclen.〕

3) 回転時間が生産物形成および価値形成ならびに剰余価値の生産に及ぼす影響。〔Einfluß der Umschlagszeit auf Produkt- und Werthbildung und Produktion des Mehrwerths.〕

第3章。」[8]

このプランと第2部第1稿の本文の構成，したがってまたそれのなかの表題とはかなりのずれがある。プランでは最後の章には「第3章」としか書かれていないので，第1稿の本文から第1章および第2章の表題だけを拾ってみよう[9]。

第2部。資本の流通過程。〔Der Circulationsprozeß des Capitals.〕

第1章〔Capitel〕。資本の流通。〔Der Umlauf des Capitals.〕

1) 資本の諸変態。〔Die Metamorphosen des Capitals.〕

2) 流通時間。〔Die Circulationszeit.〕

3) 生産時間。〔Productionszeit.〕

4) 流通費。〔Circulationskosten.〕

第2章。資本の回転。〔Der Umschlag des Capitals.〕

1)　流通時間と回転。〔Umlaufszeit und Umschlag.〕

2)　固定資本と流動資本。回転諸期間。再生産過程の連続性。〔Fixes und Circulirendes Capital. Umschlagsepochen. Continuität des Reproductionsprocesses.〕

3)　回転と価値形成。〔Umschlag und Werthbildung.〕

まず，両者を比べてすぐに目につくのは，書記法上の相違である。

第2部第1稿	同プラン
*C*apitel	*K*apitel
*C*apital	*K*apital
Produ*c*tionszeit	Produ*k*tionszeit
Cir*c*ulation	Cir*k*ulation
cir*c*ulirend	cir*k*ulirend

第2部第1稿でも第2部第3稿でも，また第3部第1稿でも，マルクスは左側の書き方をしている。それにたいして，第2部第4稿でも第2部第2稿でも，マルクスは右側のように書いている（なお第2稿は，その番号づけにもかかわらず，第4稿のあとに書かれたものである)。このような書記法上の変化は，マルクスが第1巻初版の印刷用原稿を書くときか，あるいはその校正をしているときに生じたものではないかと思われる。というのは，この版をマルクスは右側の書記法で統一する必要があったからである。とにかく，この時期の前後に，これらの綴りの書記法上の変更が生じているのは確かである。この点から見ると，表紙プランは，どんなに早くても第2部第3稿よりもあとに書かれたものであって，第1稿のまえに書かれたとは考え難い。

次に，プランと第1稿の本文とを内容的に比較すると，3点を指摘できる。

第1。プランと第1稿の表題だけを見ると，第2章の表題はどちらも「資本の回転」となっている。ところが，第1稿の本文での記述からわかるのは，はじめマルクスは「資本の回転」を第1章の第3節で論じること

にしていて，じっさいこの第3節の表題を書くときに，いったんは「資本の回転」と書き，ここで資本の回転について一般的規定を与えたのであるが，この節を書いている途中で，これを変更して，この節で「先取りして回転の一般的概念について述べたこと」[10]を第2章の冒頭にもっていくことにした，ということである。このことを念頭において表紙プランを見ると，ここではすでに，第2章の第1節は「回転の概念」となっているのであって，このようなプランが，いま見たような第1稿本文での試行錯誤に先行するとはとうてい考えられない[11]。

第2。プランの第1章第1節では，「資本の諸変態」のあとに，「貨幣資本，生産資本，商品資本」と書かれている。これにたいして，第1稿の本文の第1節の表題では，上に見られるように，「貨幣資本，生産資本，商品資本」がない。これは，表題では書かなかったというのではなくて，マルクスは当初，本来の商品資本だけでなく，G—Wの変態の結果としてのW（「生産手段の形態にある商品」）をも商品資本と呼び，のちの貨幣資本循環，生産資本循環，商品資本循環の三つの循環と並べて，そのような資本を出発点および終点とするW—P—W′—G′—Wという循環を一つの循環形態としていたのである。ところが，マルクスはまさにこの第1章を書いていくなかで，この循環を独自の一形態と見ることをやめ，またG—WのWを商品資本と呼ぶことをやめて，三つの資本の概念と三つの循環形態とを，とりわけ商品資本の概念を明確に仕上げていくのである。このような本文での苦闘のまえに，資本の三形態を明確に列記した表紙プランのようなものがあったとは考えられない[12]。

第3。第4稿とそれに先行する断片とのフォトコピーの入れ替わりについてはすでに述べたが，この二つがじつは，ここでの問題の決定的な手掛りとなる。4ページしかないこの断片でマルクスは，まず次のような表題を書いた。

第2部。資本の流通過程。〔Der Cirkulationsprozeß des Kapitals.〕

第1章。資本の流通。〔Die Cirkulation des Kapitals.〕

1)　資本の諸変態。〔Die Metamorphosen des Kapitals.〕

そしてこのページの下半で，彼はもう一度はじめから書き直しているのであるが，そこではこう書かれている。

1)　資本の諸変態——貨幣資本，商品資本，生産資本。〔Die Metamorphose des Kapitals: Geldkapital, Waarenkapital, Productives Kapital.〕

この直後に，第4稿の本文に，マルクスは次のような表題を書いた。

第2部。資本の流通過程。〔Der Cirkulationsprozeß des Kapitals.〕

第1章。資本の流通。〔Der Umlauf des Kapitals.〕

1)　資本の諸変態——貨幣資本，生産資本，商品資本。〔Die Metamorphose des Kapitals: Geldkapital, Waarenkapital, Productives Kapital〕

2)　生産時間と流通時間。〔Produktionszeit und Umlaufzeit.〕

3)　流通費。〔Cirkulationskosten.〕

第2章。資本の回転。〔Der Umschlag des Kapitals.〕

1)　回転の概念。〔Begriff des Umschlags.〕

2)　固定資本と流動資本。(設備資本と経営資本。)〔Fixes und Cirkulirendes Kapital. (Anlagekapital u. Betriebskapital.〕

これらを見ればすぐにわかるのは，第2章の第2節で「回転循環」のかわりに「(設備資本と経営資本)」となっていることを除いて，表紙プランと基本的に一致している，ということである。

ただ，最後のものの第1章の表題が Der Umlauf となっていて，これはむしろ第1稿での表題と一致しているように見えるかもしれない。しかし，じつは第4稿の本文では，マルクスはいったん Die Cirkulation と書いたのちに，それを Der Umlauf に訂正しているのである。そこで，これらの草稿での第1章の表題の変化を追ってみると，次のようになる。書記法上の変化にも注目されたい。

第1稿	Der Umlauf des *C*apitals.
表紙プラン	Die Cir*k*ulation des *K*apitals.
第4稿直前の断片	Die Cir*k*ulation des *K*apitals.
第4稿で最初に書かれたもの	Die Cir*k*ulation des *K*apitals.
第4稿で訂正されたもの	Der Umlauf des *K*apitals.

要するに，表紙プランと第4稿断片と第4稿は同じ時期に書かれたものである。しかも，プランの第2章の第2節の表題が第1稿のそれに近いことと，それに「I)」と書かれて第1稿と一緒にされていたこととを考えあわせるならば，この表紙プランは第4稿の後ではなくそれよりも前に書かれたものであることは確かである。

以上の考証から，プランと第1稿との先後関係については，前者が後者よりもあとに書かれたことが明らかであるが，さらにこのプランの執筆時期についても，ほとんど確実に次のように言うことができる。すなわち，表紙プランは，マルクスが第4稿の執筆にかかろうとしていた時期に，しかし第4稿直前の断片よりも前に書かれたものなのである。

この論点の最後に，表紙プランの末尾にただ「第3章」とだけ書かれていることから共同稿が，「第3章は，第2部の第1稿が書かれていく途中で「流通と再生産」という表題をもつことになり，同時にマルクスはこの章の構造を仕上げたのである」[13]，としている点について，筆者は「この点については，いろいろな推定をすることが可能だが，マルクスはすでに第1稿の最終ページに第3章のためのプランを書いていたことが考慮されなければならないであろう」，と述べておいた[14]。

〔第3の論点について〕

さて，共同稿にかんする最後の第3の論点である，第2部第1稿が書かれたのは，第3部第1稿のどのあたりを執筆していたときであったか，という問題に移ろう。これは結局，第3部第1稿のなかの記述と第2部第1稿のなかの記述とのなかに手がかりを求めて推定する作業になる。共同稿

は，すでに述べたように，第2部第1稿が書かれた時期は，どんなに早く見ても第3部第1稿の256ページが書かれた後，そしてどんなに遅く見ても275ページが書かれる前であった，と推定していた。

共同稿のなかで決定的な役割を果たしたのは，第3部第1稿の256ページで，第2部のうちの流通費にかんする節として，第1章の§3を挙げていることであった。これは明らかに，第2部第1稿の本文での構成とは一致しておらず，さきの表紙プランに一致している。共同稿の執筆者は，プランを第1稿よりもまえに書いたものだと思い込んでいたから，彼らにとってこの事実は，マルクスがこのページを書いたときには，第1稿の本文はまだ書かれていなかったことを意味したのであった。そこで彼らは，ここよりもあとで第2部第1稿が書かれたと判断し，そこで次に，第3部第1稿のこれ以降のところから，第2部第1稿が書かれた時期の下限を示唆する箇所を探し出さなければならなかった。共同稿は，「マルクスは「〔第2部〕第1稿」のなかで，金銀のもつ貨幣資本としての機能能力という問題の考察は第3部第4章に属することに触れているが，しかしそのさい，この問題がそもそも『資本論』のなかで解明されるものかどうかについて疑念を表明している。にもかかわらず，この問題は第3部草稿の第4章の275—278ページで分析されている」[15]，だから，この部分にかかったときには，すでにマルクスはこの疑念を払拭していたのであって，このことは第2部第1稿がそれ以前に書かれたことを示唆している，と考えたのである。

しかし，さきに見たように，表紙プランは第2部第1稿よりも後に書かれたものである。このことを考慮すれば，共同稿が第2部第1稿の書かれた時期の上限を推定する根拠とした箇所は，逆にその下限を示すものとなる。なぜなら，256ページの記述の第2部第1稿本文との不一致は，ここではすでに第2部第1稿が書き終えられていたことを意味するのだからである（ただしこのことは，プランが書かれていたことを意味するものではない）。しかも，それよりも前の243ページに，同じく，流通費にかんする

節として第2部第1章§3をあげている箇所がある。だから，この243ページが，第2部第1稿の書かれた時期の下限を示すものと言わなければならない。共同稿が下限を示すものと見た記述が，そこではすでに第2部第1稿が書かれていたことを示しているかどうかについては疑問がある[16]が，それよりも前の243ページに下限を示す箇所があるのであるから，これについての検討は必要がない。

そこでこんどは，243ページ以前のどこかにその上限を示す箇所を見いだす必要がある。共同稿は，第3部第2章の執筆中にはまだ第2部第1稿が書かれていなかったことを示すものとして，この章のなかの164ページに「第2部はまだ書かれていないが」云々という記述があることを挙げているが，筆者はそれよりもあとの182ページに，「[市場の概念は，その最も一般的なかたちでは，資本の流通過程についての篇で展開されなければならない。]」，とあるのに注目した。というのは，第2部第1稿の本文では，すでに，その第1章第1節のなかで（32—33ページ），市場の概念がきわめて一般的なかたちで論じられているのであって，182ページの記述は，このときにはまだ第2部第1稿が書かれていないことを示唆しているからである。

以上の論拠から，筆者は，第3部第1稿の執筆中に第2部第1稿が書かれた時期の上限は，第3部第1稿の182ページであり，下限は243ページである，という結論を出したのであった。

5） 拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，『経済志林』第50巻第2号，139—140ページおよび151—157ページ。

6） 拙稿「「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について(上)」，『経済志林』第51巻第2号，13ページ。

7） 前掲拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，124—130ページ。

8） MEGA, II/4.1., S. 139. 邦訳：中峯照悦・大谷禎之介他訳『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』，大月書店，1982年，8ページ。

9） Ebenda, S. 140, 202, 209, 222, 231, 245, 290. 邦訳，9, 79, 90, 105, 114, 130, 184ページ。

10） Ebenda, S. 231. 邦訳，114ページ。

11）詳しくは，前掲拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，126—127ページ，および，前掲拙稿 „Zur Datierung der Arbeit von Karl Marx am II. und III. Buch des Kapital", S. 98-99, を参照。

12）詳しくは，前掲拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，127—129ページ，および，前掲拙稿 „Zur Datierung der Arbeit von Karl Marx am II. und III. Buch des Kapital", S. 99-101, を参照。

13）Miskewitsch/Ternowski/Tschepurenko/Wygodski, „Zur Periodisierung der Arbeit von Karl Marx am „Kapital" in den Jahren 1863 bis 1867", S. 300.

14）前掲拙稿 „Zur Datierung der Arbeit von Karl Marx am II. und III. Buch des Kapital", S. 102.

15）В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над《Капиталом》в 1863-1867 гг.*, стр. 105. 邦訳，207ページ。

16）この点については，前掲拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，131—132ページ，で述べておいた。

3.　モスクワからの返書とそれへの反論

〔モスクワの MEGA 編集者からの返書〕

すでに述べたように，アムステルダムの雑誌の草稿をモスクワに送ったところ，それへの返書があり，そのなかで，第1の論点については筆者の結論に同意すると記されていた。

しかしこの返書は，第2および第3の論点については，「貴論の諸論拠が真剣な注意に値するものであることは疑いがないとはいえ，われわれの現在の見解では，貴論の結論には疑問の余地がないわけではない」としていた。その理由は，大要，次の5点であった。

第1。表紙プランの上には，マルクスが書いた「I)」という数字があって，これが第1稿に属するものであることを意味しているのだから，MEGA 第2部第4巻では，プランは無条件に第2部第1稿の前に置かれなければならない。

第2。第2部第1稿の構造は表紙プランの編成に比べてより仕上げられ

た，より熟した性格をもっているように思われる。①第3章は，プランではまだ内容が未定となっている。②第1章の表題が，プランでは「資本のCirkukation」となっているのにたいして，本文では，すでにのちに確定された「資本の Umlauf」となっている。

第3。第1稿を3章構成にしようという構想は，第1稿にかかるまえからあったものである。

第4。資本の循環の3形態は，すでに『経済学批判要綱』でも『1861—1863年草稿』でも分析されていた。

第5。筆者が指摘した第1章の表題の「動揺」（つまり，Umlauf → Cirkulation → Umlauf）は，第1稿とプランとの先後関係を証明するものではない。

第6。プランでの書記法は，第1稿でもそれ以前の草稿でも使われている。たとえば，「直接的生産過程の諸結果」の章名「第6章」での「章」は，Capitel ではなくて Kapitel となっている，等々。

〔返書にたいする筆者の反論〕

これにたいして，筆者は，とりあえず，次のように述べておいた[17]。

第1。筆者は，プランに「第3章」と書かれていることを，プランが第1稿よりもあとのものであることの論拠にはしていない。第1稿の執筆にかかるときにすでに3章構成が予定されていたことにはなんの異論もないのであり，問題は，プランに「第3章」としか書かれていないことをどう見るかということである。共同稿の主張は，これは第3章構想の未成熟の証拠と見るが，むしろ，第1稿の末尾にすでに第3章のプランを書いたのでそれを繰り返さなかったのである。（だから，むしろそれは，第1稿のあとに書かれたことの傍証でもあるのである。）

第2。資本の循環の3形態が『経済学批判要綱』と『1861—1863年草稿』ですでに論じられているのはそのとおりだが，その成熟度が問題であり，商品資本の概念はまさに第2部第1稿執筆中に仕上げられたのである。

第3。筆者が第1章の表題の変遷を追って確認したのは，プランでの表題と第4稿直前の断稿と第4稿の最初の表題とが同じだという事実であって，これがプランと第4稿との強い関連を示唆していることは明らかである。筆者は，「動揺」していることがプランと第2稿との先後関係を証明するなどとは言っていない。

第4。書記法については，取り上げる草稿の未定稿的性格の程度が考慮されなければならない。(たとえば，「諸結果」の場合には，印刷のための清書に近い原稿であるのだから，書記法もそれに影響されるのである。)そのうえで，なお，Circulation（第1稿）→Cirkulation（プラン）→Cirkulation（第4稿）と Cirkulation（プラン）→Circulation（第1稿）→Cirkulation（第4稿）とのどちらが自然な変化か，ということが考えられるべきである。

第5。プランの上に「I)」と書かれていることをどう考えるか，という問題はたしかに残るが，このことがプランの先行性を証明するわけでもない。プランをあとから書きつけて第1稿と一緒にしておいたものを，さらにあとから全体として第1稿とした，ということも十分に考えられる。(なお，このように書いたときには，第1稿の表紙の状態がよくつかめていなかったのであるが，MEGA 第2部第4巻第1分冊の付属資料で，マルクスがこの草稿を第1稿としていたことを示すのは，まさにこの「I)」という書き込みにほかならず，このほかになにか表紙の類がついているわけではないことがはっきりした。このことから推定できるのは，マルクスは第1稿につけた表紙そのものにプランを書きつけ，そしてこの表紙に「I)」と書いて，第1稿と命名したのだった，ということである。)

以上の反論は，書簡のかたちでモスクワに伝えられた。

17) 前掲拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)」，15—16ページ。

4. 「1863—1865年草稿」にかんする2論文

その後しばらくしてから，モスクワの研究者から受け取った複数の書簡には，いずれもごく短くではあったが，「いまではわれわれは貴見と完全に同じ結論に到達している」と書かれていた。「同じ結論」の詳細は不明なままであったけれども，筆者はもう，それらへの返書にこの問題についての立ち入った言及をするつもりはなかった。

〔「第3の『資本論』草稿」についての新共同論文〕

1984年になって，フランクフルトのマルクス主義研究所（IMSF）の年報『マルクス主義研究』第7号に「1863—1865年の第3の『資本論』草稿——公刊をまえにしての概観——』という表題で，アントーノヴァ，シュヴァルツ，チェプーレンコの共同論文が発表された。「第3の『資本論』草稿」と言っているのは，第1の『経済学批判要綱』と第2の『1861—1863年草稿』にたいして，この時期に書かれた第1巻から第3巻までの全草稿をひっくるめて第3のものとしているわけである。副題に書かれているように，これは，MEGA 第2部第4巻でこの「第3草稿」を公刊し始めるにあたって，MEGA への収録の順序を決定する各草稿の執筆時期の順序とそれらの内容を概観・紹介しようとしたものである。ここでは，まず，「原稿諸部分の複雑な順序」を述べ，そのあと，第1部の草稿である「直接的生産過程の諸結果」，第2部の第1稿，第3部の第1稿，という三つの草稿の内容をこの順序で概観している。

その第1節「原稿諸部分の複雑な順序」では，主としてこれらの三つの草稿の執筆時期を論じている。本稿にかかわるのは，このなかの，第2部第1稿と第3部第1稿との関連の部分である。そこでは，さきに触れた，第3部第1稿の第2章の164ページにある，「第2部はまだ書かれていないが」云々という記述を挙げたのちに，次のように書いている。

「これらの言葉を疑う理由はない。それゆえ，第2部第1稿は第3部第

2章の執筆のあとではじめて書かれたのである。第3部の仕事を中断したのがいつかを正確に確定することは，もろもろの無理からぬ理由からもちろんできはしない。それでも，モスクワの研究者の仕事を継続した日本の研究者の大谷禎之介は，まったく説得的に，182ページから243ページまでのあいだ，すなわち，平均利潤についての章の中ごろから利潤率の低下についての章の末尾までのあいだの時期に限定することに成功した。〔ここに，アムステルダムの雑誌に掲載された拙稿を指示する脚注がつけられている。——引用者〕」[18]

ちなみに，これに続けて，なぜこの時点で第2部の最初の原稿を書くことになったのかということについて，次のように論じている。

「じっさい，よりによって利潤率のところで，あるいは商人資本の前で流通過程にはいる，内的な論理があったのである。というのは，利潤率には回転の継続期間が，しかも利潤率が純粋の流通時間によって減少させられるというしかたで，作用するのだからである。事実，第3部の第1章の草稿には，回転が利潤率に及ぼす作用についてのタイトルだけが見いだされるのであり，その結果エンゲルスは，この部の編集にあたって，テキストを自分で仕上げることを強いられたのである。」[19]

見られるように，この新共同論文で，第2部第1稿と第3部第1稿との関連についての筆者の考証とその結論が，かつての共同論文およびチェプーレンコ論文の当の執筆者によって承認されたのであった。

〔『資本論』第3部第1稿についてのミュラー論文〕

さらに，1988年には，ベルリンのマルクス=レーニン主義研究所の機関誌『マルクス=エンゲルス研究論集』第25号に，マンフレート・ミュラーの論文「『資本論』第3部のための1864—1865年のマルクスの草稿について」が発表された[20]。この論稿も，MEGA での第3部第1稿の公刊をまえにして，この草稿の刊行準備にあたっているミュラーが，その内容などについて論じたものである。論稿は，「1. 内的論理についての若干の前置

き」,「2. 前史の諸段階」,「3. 草稿の性格」という3部分からなっている。第3部第1稿について書かれたものとしては，これまでで最も詳しいものであり，新たに述べられた事実や興味深い指摘も含まれている。その第3節のなかで，ミュラーは,「この草稿の執筆の過程もまた示唆するところの多いものであり，しかも次の三つの点でそうなのである」と述べたあと，第1に，興味深いことに,『1861—1863年草稿』のときに類似して，ここでもマルクスが第1部の執筆の直後に第3部の執筆に取りかかったこと，第1稿はまず第2章の「利潤の平均利潤への転化」から書き始められ，次いで第1章の「剰余価値の利潤への転化」に移り，それから，利潤率の傾向的低下の法則にかんする第3章にはいった，という順序に注意を喚起している。

続いて，第2点として，次のように書き始めている。

「第2に，この草稿の成立にとって特徴的であるのは，マルクスは第3章のあとに，または商人資本にかんする第4章のまえに，まず間違いなく1864年末に，この草稿の仕事を中断して，第2部「資本の流通過程」の最初の草稿を執筆したことである。……マルクス=エンゲルス研究者たちによって最初にこの中断そのものが根拠づけられたときには，第4章はすでに書きあげられていた，と主張された。〔ここに，既出の『マルクス=エンゲルス年報』での共同論文を指示する脚注がつけられている。——引用者〕しかしながら，この中断がこの章を執筆するまえに生じていたことを示す動かしがたい諸論拠がある。〔ここに，アムステルダムの雑誌に掲載された拙稿を指示する脚注がつけられている。——引用者〕ここで中断が生じたことには，明らかに形式的ではなくて方法的な諸原因があった。」[21]

ミュラーが「方法的な諸原因」と呼ぶのは，次のことである。

「草稿には一つの欠落があるが，それは資本の回転が利潤率に及ぼす影響に関するものである。周知のように，このことを決定的な意味をもつ問題だと考えたエンゲルスは，印刷のためにこの欠落を補ったのであった。ともかく，マルクスは第2章を執筆するさいに次のことに注意するよう指

示した，――「流通時間が利潤率にどの程度影響するか――この問題はここでは詳細に研究しないでおく。[というのは，第2部はまだ書かれていないが，そこでこの問題が特別に考察されるはずだからである。]」(164ページ)。第2部の草稿でマルクスは，剰余価値率のより詳細な規定，つまり剰余価値率の剰余価値年率としての規定を展開した。この規定を彼は年利潤率の叙述のための土台と理解していた。彼が資本の回転に取り組んでいたときには，さらに，「利潤のところで本格的な考察を行なうために」固定資本が剰余価値の率と量との形成に及ぼす影響を綿密に研究しなければならない〔79ページ〕，また「(利潤率はここでは，第3部第1章のために，ついでに論じられるべきものである)」〔76ページ〕，と述べられていた。つまり，まず間違いないところ，叙述の論理がマルクスに，まず問題の欠落を埋める必要，それゆえ第3部の仕事を中断してまず第2部を仕上げる必要を思い起こさせたのである。」[22]

ミュラーは，「しかしこれにはもう一つの理由があったかもしれない」と言って，次のように述べている。

「周知のように，マルクスはすでに，流通過程については独立に論じている箇所をもたない『1861―1863年草稿』で，商業資本と利子生み資本との諸運動を研究していた。そのさい次のような根本的な考えが彼の心にかかっていた，――すなわち，貨幣資本と商業資本は，一方では「生産資本の一般的な形態規定性」であり，他方では自立化されない〔これは「自立化された」の誤りであろう――引用者〕形態で，つまり「特殊的諸資本（だからまた独自な資本家群）として」登場する，ということである。ここでは，次のようにも述べられている，――「それらはまた，生産資本一般の特殊的諸形態として，特殊的諸資本の諸部面，資本の価値増殖の特殊的諸部面にもなる」。生産資本のあいだの分配闘争のもろもろの法則性をテーマにした，草稿の最初の三つの章のあとで，マルクスが直面した問題は，もろもろの特殊的資本形態の叙述は，生産資本の諸変態の叙述からどのようにして，厳密に区切られるべきか，この両者間の移行は，どのよう

に個々的に具体化されるのか，ということであった。そしてこのことは資本の流通過程の分析を前提していた。諸資本の現実的運動を問題とするまえに，まずもって，諸資本のこの自立化の可能性が——資本の形態的な運動が——固定されなければならなかったのである。」[23)]

ちなみに，ここでミュラーが述べている点は，じっさい，きわめて興味深いテーマをなすものである。つまり，マルクスがなぜ，第3部の商業資本と利子生み資本との分析にはいる直前に，第2部の書き下ろしに向かわざるをえなかったのかを，これらの分析との関連で説明する，という課題である。それは一方では，第2部第1稿および第3部第1稿を，この観点から読み解くことを要求するが，他方では，この問題意識は，第3部第1稿の商業資本および利子生み資本にかんする記述を，第2部第1稿に引き続いて書かれたものとして読み解くことに導くであろう。

ミュラーはこのあと，第3点として，その後のある時期にマルクスが第6章「超過利潤の地代への転化」と第7章「収入とそれらの諸源泉」との執筆を並行的に進めたことを挙げているが，ここでは省略しよう。

ともあれ，ここでも，拙稿での考証が，第3部第1稿の中断箇所の推定における「動かしがたい諸論拠〔gewichtige Argumente〕」と見なされていることが確認できたわけである。

18) Irina K. Antonowa/Winfried Schwarz/Alexander Tschepurenko, Der dritte „Kapital"-Entwurf von 1863-1865—Ein Überblick vor der Veröffentlichung. In: Marxistische Studien (Jahrbuch des IMSF), Nr. 7, 1984, S. 397.

19) Ebenda, S. 397-398.

20) Manfred Müller, Über Marx' Entwurf zum dritten Buch des „Kapitals" von 1864/1865. In: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 25, 1988.

21) Ebenda, S. 21.

22) Ebenda.

23) Ebenda, S. 21-22.

5.　MEGA 付属資料での考証

1863—1865年の「第3草稿」についての以上のような紹介があったのち，1988年に MEGA 第2部第4巻でのこの草稿の刊行が開始された。この巻は，全体として「1863—1867年経済学草稿」とされ，三つの分冊として刊行されることになっている。すでに刊行された第1分冊は，『資本論』第1部の伝えられている唯一の草稿「第6章　直接的生産過程の諸結果」，第2部第1稿，それにマルクスの講演『価値，価格，利潤』（従来『賃銀，価格，利潤』と呼ばれてきたもの）が収められている。第2分冊が，第3部第1稿となる予定で，1992年刊行が予告されている。第3分冊には，1863—1867年の時期に執筆された，これらのもの以外の『資本論』諸草稿が収められるが，そのなかでとりわけ注目されるのは，第1稿に続く第2部のいくつかの草稿であろう。

この第1分冊に収められた第2部第1稿は，わが国ではすでに，原語の解読文にもとづいて翻訳作業が行なわれ，1982年に出版されていた[24]。今回の MEGA に収められた第1稿本文とそれへの異文および注解によって，この邦訳にもさまざまの点で手が加えられる必要が生じてはいるが，解読文による作業であったために，MEGA 本文とはかなりよく対応していると言うことができる。いまのところ MEGA のこの巻については，『資本論草稿集』に収めるための作業の具体的予定は立てられていないが，それはいずれ始まることになるであろう。

〔第2部第1稿と第3部第1稿との執筆時期の関係についての考証〕

ここでは，この第2部第1稿についての付属資料を見ることにする。付属資料としては，他の草稿の場合と同じく，まず「成立と来歴」があって，ここでは草稿を簡単に特徴づけたのち「本草稿の執筆時期について」，「準備資料」，「マルクスによる「第1稿」のその後の利用」がそれぞれ述べられ，最後に「典拠文書についての記録」が置かれている。そしてそのあと

に，「異文一覧」，「訂正一覧」，「注解」が収められている。そのうちここで取り上げるのは，「本草稿の執筆時期について」と「マルクスによるその後の利用」のなかの一部とである。

まず，「本草稿の執筆時期について」を全文紹介しよう。

「この草稿をマルクスは，日付をつけないままにしておいた。おそらくこれが書かれたと思われる時期は，第3の『資本論』草稿のうちの他の部分への，著書『経済学批判』への個々の指示に基づいて，また第3部の草稿（MEGA 第2部第4巻第2分冊を見よ）に含まれている第2部へのもろもろの指示によって，決定されることができる。

第1に，「第1稿」は，第1部の「第6章」〔直接的生産過程の諸結果〕のあとに，つまり1864年の夏のあとに書かれた。この「第6章」への直接の指示がこのことを証拠立てている（141—142ページおよび353ページを見よ)。第2に，この草稿には著書『経済学批判』への指示があり（222ページを見よ)，このことから，当時は，第1部のための序論も商品および貨幣にかんする章も書かれていなかったと結論される。ただし，1866年10月13日づけのルイ・クーゲルマンあての手紙から，当時少なくとも，マルクスの諸プランでは——ひょっとすると原稿としても——第1部の第1章「商品と貨幣」（MEGA 第2部第5巻，17—101ページ，見よ）はすでに存在していたことが明白であるが。最後に，第2部の「第1稿」に含まれている，第1部へのすべての指示（243，315，325，327，341，353—354ページを見よ）は，マルクスが『資本論』を「商品と貨幣」という1章で始めようと決める以前に生きていたこの第1部のプランに対応している。そのように決めたことによって，第1部の各章の番号づけには変更が生じることになったのであった。

1866年末または1867年の初頭に，マルクスは「第6章」を『資本論』第1部の最終稿には取り入れないことに決めた。それゆえ，「第1稿」に含まれている，「第6章」への指示は，同様にまた，この第2部草稿は1866年末よりもまえにできあがっていたことを示している。したがって，「第

1稿」は1865年または1867年に書かれたとしている，『資本論』第2巻への序文でのエンゲルスの言明について言えば，このうちの前者の日付に同意することができるわけである。

この草稿が1865年の前半に書かれたことは明らかである。このことを示しているのは，なによりもまず，〔この草稿での〕『資本論』第3部への諸指示ならびに第3部でのこの「第1稿」への諸指示である。前者は，例外なく，第3部の第2の部分にある草稿が示している実際の構造とは一致していない。第1に，マルクスはここで繰り返して第3部の最後の章，つまり第7章「貨幣の還流運動」を指示している（151，289，305ページを見よ）が，この章は，この部の仕事の最後の段階では存在しなくなったものである。第2に，「第1稿」では，第3部の第6章を指示しているが，そのさい明らかに，収入とそれらの諸源泉の章が考えられている（321ページを見よ）。けれどもこの章は，第3部の草稿では第7章なのである。第3に，第3部の第4章への指示（360ページを見よ）は，マルクスが利子生み資本を当時まだ第3部の第4章で論じるつもりであったことを示しているが，他方で，第3部の草稿の仕事が進むうちに，第4章は最後には2つの自立した章——第4章と第5章（利子生み資本についての）——に分割されたのである。それゆえ，「第1稿」は第3部の第5章の執筆よりもまえにできあがっていなければならないのである。

第3部の本文での第2部への諸指示は，マルクスが第3部の仕事を始めたときには「第1稿」はまだ存在していなかったことを示している。たとえばマルクスは第3部の第2章の164ページでこう書いている，——「流通時間が利潤率にどの程度影響するか——この問題はここでは詳細に研究しないでおく。[というのは，第2部はまだ書かれていないが，そこでこの問題が特別に考察されるはずだからである。]」（MEGA 第2部第4巻第2分冊を見よ）。同様に，同じ草稿の182ページには，当時は「第1稿」がまだまったくなかったという結論をもたらす一つの記述がある，——「[市場の概念は，その最も一般的なかたちでは，資本の流通過程につい

ての篇で展開されなければならない。]」しかし，まさに「第1稿」のなかで，このことが「最も一般的なかたち」で論じられているのである（189—190ページを見よ）。

そのあと，すでに数10ページさきには，いくつかではあるが，いまでは第2部があることを示唆するマルクスの記述がある。たとえば，第3部の243ページおよび256ページ——第3章——には，第2部第3章第3節が，はっきりと流通費についての節として言及されている。けれども，「第1稿」の本文においても，この節では資本の回転の一般的概念を考察しようとしていたマルクスの当初の考えから見ても，第1章第3節の対象は，まだそれとは違ったように書かれている。このことから，当時は「第1稿」が存在していたばかりでなく，マルクスはまた，すでに第2部の構造を明確に規定していたことが，結論されうるのである。その後，もっとあとの第2部のもろもろの異文および『資本論』第2巻では，流通費はまさに，第1章第3節で論じられているのである。（MEGA 第2部第4巻第3分冊，MEGA 第2部第11分冊，を見よ）。

こうして，第2部の「第1稿」は，あるいは少なくともその第1章は，第3部草稿の第2章の182ページのあと，そして第3章の243ページのまえにできあがったのでなければならない。もちろん，マルクスは第3部の仕事を完全に中断して第2部を書き始めたのか，それとも一定の期間，彼の著書のこの二つの部分の仕事を並行的に進めたのかは，明らかではない。第3部の第2章と第3章とは1864年の9月のあと，1865年の8月のまえにできあがったのだから，第2部「第1稿」も，1864年末から1865年の前半の頃に書かれたと推定することができる。

けれども，「第1稿」の若干の用語上の特殊性が，日付をもう少し限定することに役立つ。「第6章」（1864年に書かれた）では，ほとんどもっぱら，「労働能力〔Arbeitsvermögen〕」という概念が使われているのにたいして，第3部の最初の5つの章（1864年8月—1865年9月）では，すでにしばしば同義語として「労働力〔Arbeitskraft〕」という呼称が現われ

ている。著書『価値，価格，利潤』（1865年5月―6月）では，「労働力〔labour power〕」という表現だけが使われている。同義的な概念ではあるが，一方から他方への移行は，「第1稿」で生じたのである，――つまり，第1章ではほとんど前者「労働能力」が使われているのにたいして，第2章と第3章では，大部分「労働力」が使用されているのである。ここから結論できるのは，「第1稿」は著書『価値，価格，利潤』の直前に，つまり1865年のまえに書かれたか，あるいは少なくとも書き始められた，ということである。」[25)]

以上の時期考証には，いくつかの側面があり，とりわけ日時をどう確定するかという点では，まだかなりの幅でしか言えないことがわかるが，ただ，マルクスが第3部第1稿のどのページを書いているところで中断して第2部第1稿を書いたのかという点については，筆者のかつての考証がここでの記述に生かされ，両者が完全に合致していることが確認できるであろう。

〔第2部第1稿と表紙プランとの執筆時期の関係についての考証〕

ただ，以上のところでは，かつての共同稿での誤った判断，すなわち第2部第1稿がその表紙プランのあとに書かれたという判断がすでに放棄されていることが前提されてはいるが（なぜなら，この判断を前提するならば，別の結論が生ぜざるをえないからである），その点については触れられていない。つまり，以上の考証では，表紙プランは利用されていない。それは，じつはまったく当然のことであった。というのも，表紙プランは，第1稿が書かれた時期，また第3部第1稿が書かれた時期よりもずっとあとで書かれたものであって，第2部第1稿と第3部第1稿との関連の考証にはそれ自体としては積極的に役立つものではないのだからである。しかし，第2部第1稿と表紙プランとの関係については，そのあとの「マルクスによる「第1稿」のその後の利用」の最初のパラグラフのなかで触れられている。これを見てみよう。

「この草稿は，のちに，第2部を印刷のために準備する目的をもってこの部をあらためて執筆するさいに，そのための重要な基礎となった。このことに関連して，「第1稿」の表紙に書かれた第2部プラン草案が生まれた，――それは，マルクスが1867年の夏に書いた新たな草稿である「第4稿」（MEGA 第2部第4巻第3分冊を見よ）の仕事を開始する直前であった。このプラン草案が1867年に書かれたものであることを証明しているのは，マルクスが『資本論』第1巻のドイツ語初版（MEGA 第2部第5巻を見よ）および「第4稿」以降ではじめて用いた書記法，ならびに，プランに起草されている，第2部の構造であって，この後者は，「第1稿」とは異なっているが，のちの草稿の構造に近づいているのである。」[26]

ここでは，①表紙プランは第1稿よりもあとに書かれたこと，②しかもその時期は，マルクスが第4稿にかかる直前であったこと，③その論拠として，プランでの書記法が『資本論』第1部初版および第4稿のそれと合致していること，④プランの内容は，のちの諸草稿のほうに近いこと，が述べられている。これらはすべて，かつて拙稿における考証のなかで述べていたことであった。

〔まとめ〕

以上のように，MEGA 第2部第4巻第1分冊における第2部第1稿の「成立と来歴」は，MEGA 編集者たちがかつての共同稿の誤った推定を完全に放棄して，筆者の考証をその論拠のすべてとともに受け入れたことを明らかにした。モスクワからの手紙での反論で挙げられていた論拠もすべてすでに撤回されたものとみなすことができ，これでアムステルダムの論文以来の一件に最終的に決着がついたわけである。

24） 前出，マルクス『資本の流通過程――『資本論』第2部第1稿――』。
25） MEGA, II/4.1, S. 560-562.
26） Ebenda, S. 563.

（1989年10月17日）